

博士論文執筆経験談

平成21年3月修了生 高木 潤野

「今は大変だけど、たぶん何年かしたらちゃんとした仕事についているはずだから大丈夫。」—博士論文を書いていた当時の自分がよく考えていたこと。当時はその漠然とした不安がいったい何なのか自分でもよく分かっていませんでしたが、そんな中でなぜか自分を外から見つめて根拠のない自信で励ましていたのが、今となっては面白いですね。

博士論文の執筆経験を書くために、これまであまり考えてこなかった論文執筆当時の自分の気持ちとしっかり向き合ってみました。自分と向き合うというのは、人と関わる仕事をする人にとってはとても大切なことで、おかげで改めて自分がどういうことで大変だったのか気づくことができました。ではしばらくの間、個人的な体験のふり返しにおつきあい下さい。

私は、修士課程を修了してから養護学校で働き始めました。働き始めて3年目に博士課程に入ったのですが、最初の1年間は養護学校で働きながら大学に通っていました。働きながら通ったのは1年だけで、その後は論文執筆に専念するために退職するということが、博士課程に入った最初の年から決めていました。仕事を辞めたことは私にとって論文を書く上で必然だったので、それ自体については特に後悔もありませんでしたが、後から考えるとそのことが大きな気持ちの負担になっていたことが分かります。なぜ仕事を辞めたのかというと、私の場合研究の対象が養護学校に通っている子どもなので、平日の子どもが学校に通っている時間帯にデータ収集をする必要があったためです。論文を書く上では結果的にこれはよかったわけですが、他に選択肢がなかったという方が正しいかも知れません。

仕事を辞めてよかったことは、当たり前のことですが論文執筆に専念できたことです。働きながらでも時間を作ることはできますが、こまぎれの時間がたくさんあってもなかなか論文執筆にはつながりません。まとまった時間を確保できるようになったことはよかったです。ただ、よかったことはこのくらいで、他にはこれといって思い浮かびません。強いて挙げるなら、2年目に入って予定どおり退職したおかげで時間がたっぷりできて、最初に大学に行った日の妙に清々しかったですよ。

ところが、この気分は3日と持ちませんでした。仕事を辞めて大学に行くというのは、思っていた以上に大

変なことだったのです。金銭的な面は当然予想されることでしたが、それでも想像していたよりも気持ちの負担が大きかったです。結局すぐに学校の講師をいくつか掛け持ちするはめになってしまったので、時間も制約されました。時間をつくるために仕事を辞めたのに中途半端に仕事をするという、悪循環というわけです。

ただ、そういうお金のことや時間のことよりも、それ以上に大きかったのは、よりどころがぼっかりなくなってしまったような気がしたことです。今思い返してみると、論文を書くことの大変さというよりも、なんとなくどこにもよりどころがないような生活に対する漠然とした不安だったのだと思います。もちろん大学に所属しているのでそんなに不安がる必要もなかったはずなのですが、仕事を辞めて時間ができた分だけぼっかりの部分は大きかったような気がします。勤めていた学校にデータを取りに行ったり、文化祭や卒業式などで学校に顔をだしたりする度に、知らない子どもや知らない先生が多くなっていくのがなんだか寂しい感じでした。それはなぜかということ、養護学校の仕事が大好きだったからだだと思います。それから、仕事を辞めたことで、研究そのものが子どもたちの日常とは切り離れたところで行われているような気がしてしまっただけもあるかも知れません。これも本当はそんなことはないわけですが、そう感じてしまうくらい当時は孤立感があったのだと思います。

そして、そんな中で自分を励ましていたのが、「今は大変だけど、たぶん何年かしたらちゃんとした仕事についているはずだから大丈夫。」という根拠のない自信でした。この考え方は結果として正しかったようで、これによって仕事をやめてよりどころがなくなってしまった分を補っていたのです。人が生活していく上で、誰かを頼ったり誰かに頼りにされたりするのは大切なことなのですね。

もちろん論文の執筆そのものが大変だという人は多いと思いますが、もしかすると自分を客観的に見つめてみるとその他にも、思わぬところに不安や辛さの種があるのかも知れません。だからもし、博士論文の執筆に専念するために仕事を辞めて、心にぼっかり穴があいてしまったという人がいたとしたら、根拠のない自信をもつことをおすすめします。多分それで大丈夫です。私が根拠のない自信で約束します。